

宮さんの言はれた飛魚が常に産卵するのではないかと云ふ事は海水の温度の比較的變化の少ない所に起す現象らしく思はれ例へば海綿類で二五〇尋位の深所で採れる六放海綿では一年中卵を持つてゐるが、斯様な深さの所では水温の變化は四季を通じて極めて少ないのであります。又高温度の變化の少ない所に棲む動物にも同じ様な現象が見られます。例へば温泉動物のカワミナノ如き温泉内では常に卵を持つてゐますが、その温泉の周囲の河のものは卵を持つ時期が定つて居るのであります。鯉鮪では産卵期の山はあつても、その期間が長いと云ふのは水温の變化が少ないと云ふ點に關係してゐるのではないだらうかと思ひます。ウオルフォールドの鮪に於ける記録によると、二〇乃至一〇〇尋の所で産卵すると云ふ記録があります、従つて卵は海の中層に浮いてゐると言つて居ります。丸川さんの言はれたやうに表面で産卵するものもあるかもしれませんが、私はこの類の卵を探し當るには中層か、もつと深い所も調べて見る必要があると思ひます。その他産卵調査に關しては鯉の仔魚を食ふ他の大きな魚の餌も調べる必要があると思ひます。鮪が深い所を游泳してゐる事は腹足類のスピララを食つてゐる事實からしても想像されます。

**畑井** 卵が年中見出されるのは卵が腹に入つてゐる時期が長いと言ふことも考へられるのではないでせうか、又卵に油球があるとすると産卵後直ちに浮び上ると思ひますがこの點は如何でせう。

**雨宮** そう言ふことも考へられますが、まだよく解つて居りません。鯉の小さいのを見付けやうと思へば小さいのを食ふ他の大きな魚を探して見るがいゝと思ひます。岸上博士も言つて居られたやうに自然の採集者から採るのが最もいゝと思ひます。

**畑井** 然しての問題を本式に調査するには先づ小さいのを獲るに限るでせう。

**雨宮** 集魚燈で集めて見るのもいゝと思ひます。

**丸川** 集魚燈もいゝかも知れませんが、白鷗丸も南洋で集魚燈を使つて小さい魚を獲つて居ります。

**雨宮** 産卵したと思はれる鯉はハダガザラ／＼してゐると言はれて居ります。

**丸川** 産卵したものは赤味を持つてゐると言つて居ります。

**雨宮** 釣つた鯉を追ひかけて来る鯉があります。釣り上げたカジキマグロを見たら腹から卵を出して居るのが居たことがあります。

**竹田** ビンチヨマグロでは釣り上げたとき他のものがついて来ることもある様です。

**畑井** 高槻さん何か。

**高槻** 鯉鮪の産卵に就ては全く知識を持つて居りませんが、今度の企てには大いに賛意を表して居ります。實地に見聞された人々の話に依れば成熟した鯉が容易に採集されるやうで、人工受精も大變有望の様に思はれます。周到な準備のもとに適當な人を選んで、この學界に未知の鯉の發生學的研究を完成することは、單に動物發生學上に多大の貢獻をするのみでなく、水産増殖上にも重要な基礎的貢獻をするものと信ぜられますので、是非速かに實行に移されることを切望する次第であります。

**畑井** 鯉産卵場所調査の問題について今後具體的にどうしたらいいかと云ふことに就ては、本日の記録をよく讀みまして次回に於て腹案を建て、皆様の御批判を頂き度いと思つて居ります。この問題は今ま

で色々とお話が出ましたが、判明してゐるのは極く一小部で殆んど未解決の有様であります。非常に難問題ではありますが、この際、日本人の手に依つて思ひ切つて解決してみたいと思つて居ります。到底一人の力でやり得るものではありません、今後皆様の御協力を仰ぎたく、



ラバウル紀行 (二)

羽根田 彌太

ラバウル市を屏風の様に取り圍む外輪山の頂上を小路が縫ふやうに走り、鬱蒼たる熱帯樹の間に溪谷あり瀧あり、これがすつと下へ延びて植物園に連つてゐる。山中には緑色のインコが飛び天鷲絨の様な翅を持つた緑色の大きな蝶が飛び、その一つ一つが目を樂ませてくれる。

植物園はドイツ時代に設計され、恐らくジャバのポイテンゾルグにも匹敵させる積りらしかつたと云ふが英人の手に入つて、又これをよく盛り立て、來たため、今では熱帯の植物園として堂々たるものになつた。あまり研究方面は活潑ではない様であるが園の面積はラバウル市の大半を占め、市と共に一大公園の如き偉觀を呈してゐる。日の暮れぬ中に園内を歩き路を覚えておいて、同夜は園内から外輪山の小路

この席で改めてお願い致す次第であります。時間も大分おそくなりましたので、本日の座談會はこれ位にして閉ぢたいと存じます。有益なるお話を有り難度う御座いました。以上

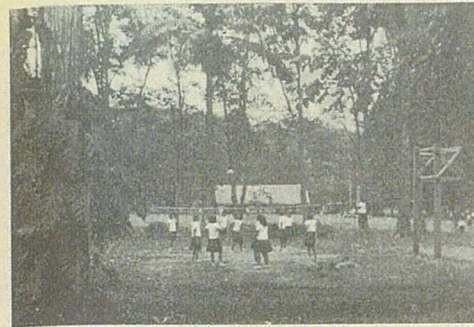
を少し登つてみた、螢が無数に群つてゐて壯觀であつた。同夜三種類の發光茸を採集した。一種はバラオ、ボナベ方面に多いタケヒカリタケ *Mycena bambusa* と思はれる緑色の強い光を放つ茸で植物園から背後の山へ登る小路に點々と光つてゐるのを見た。もう一種はかつて英領北ボルネオのクワオ附近の原始林中で採つたアミヒカリダケ *Polyphorus Henkelii* と思はれる純白の褶が美しい網目になつた茸で、ボルネオのものに比して光は非常に弱く、よほど注意しなければ見落しさうである。この茸も植物園内で可なり多く見た。他の一種は第三圖、第四圖Aの如き純白の茸で莖には透明の寒天狀の粘液物質があ

1) 2) 南洋の發光茸に就ての二三の觀察 科學南洋 第1卷 第3號 p.9, 1939.



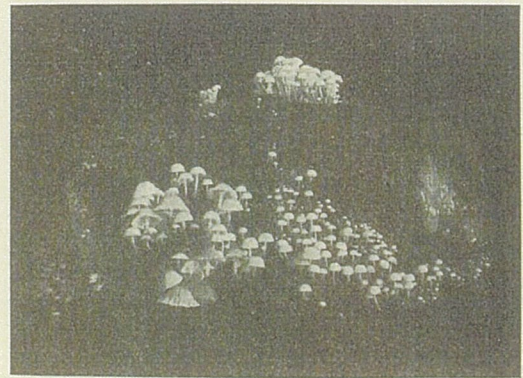
第1圖 ラバウル植物園内にて

り數十、數百と密生してゐる。この發光



第2圖 華僑の女學生 (植物園入口の運動場に於て)

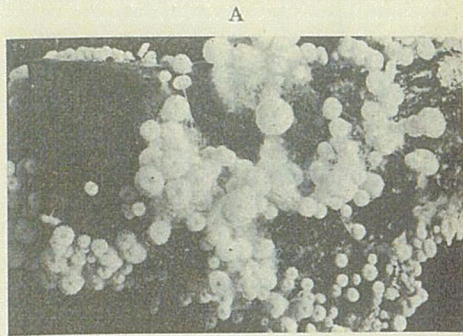
も朽木、朽葉の上も大きな光の塊となつて、密林中に光つてゐる様は何となく不氣味なものだ。これ等の茸の生へてゐる朽木は内地へ持ち歸つた處、夏になつて非常に多く發生した。確實なる種名はいづれ専門家の同定を得て報告したいと思つてゐる。植物園内には丘あり密林あり溪谷あり、しかも小路が從横に通つ



第3圖 胞子の發光するラバウルの發光茸 (4)

てゐるので、短時日ではあつたが何の危険もなく採集は能率的であつた。しかも私が訪れた時は雨期であつたのは何よりも好都合であつた。翌廿日朝十時より南賀ラバウル支店の田代恒助氏の運轉でラバウルより三十哩離れたカラバットの農事試験場へドライブした。ビラビラ<sup>2)</sup>海岸の坦々たるドライブウエイと椰子のプランテーションの中をつき切つて進む。噴火のため椰子はまだ恢復してゐなかつたが、コーヒー、ココアはもう立派に生長してゐた。農事試験場の入口に TERRITORY OF NEW GUINEA DEPARTMENT OF AGRICULTURE DEMONSTRATION PLANTATION KERAVAT と書いた立札が立つてゐる。場内に從横に自動車道路が通じ熱帯の有用樹は一々興味を惹く、場内の小高い丘に自動車を止めて晝食。此處から場内が一目に見渡され試験場を取りかこむニューブリテンの原始林も心ゆくまで眺めることが出来た。

1) Keravat 2) Pila Pila



第4圖 胞子の發光するラバウルの茸

A. 自然光にて撮影、純白の茸で茸自體には發光性がない。  
B. 暗室内にて脱落した胞子の光にて撮影 (F. 3.5 レンズにて二時間露出)



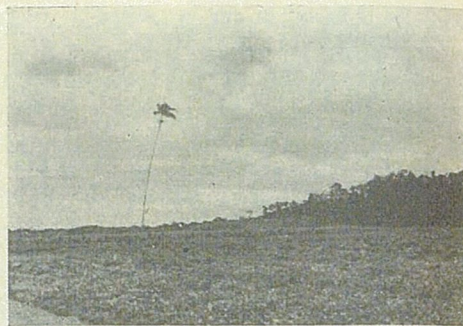
第5圖 ラバウルよりカラバットへの途中にある椰子のプランテーション

同じ道をラバウルへ引き返し植物園の一隅にある日本人墓地に参拜した。小峰磯吉翁時代には二五〇名もの日本人が繁榮したと云ふ當時を偲び、南方に骨を埋めた先輩に對して心からなる敬意を表した。當時の繁榮に比して現在では邦人僅かに廿名に過ぎない。同夜は我々のため南賀田代氏宅に集まり觀迎會を開いて下さつた。南方に於て活躍して居られる同胞に敬意を表し次に芳名を記しておく。

氏名	職	出身縣	ラバウル市民権の有無
1 田代 恒助氏	南賀ラバウル支店	和歌山	有
2 田代ユキエ氏(恒助氏夫人)	同	同	無
3 四歳位の田代氏のお嬢さん一人	同	同	無

氏名	職	出身縣	ラバウル市民権の有無
4 田代 清氏(恒助氏令弟)	南賀ラバウル支店	和歌山	有
5 荒田 邦男氏	同	鹿兒島	有
6 長濱 太市氏	農園主	熊本	有
7 鯨島 祐保氏	同	同	有
8 森清左衛門氏	同	同	有
9 鶴島 惣吉氏	同	同	有
10 伊藤松太郎氏	同	同	有
11 伊藤ツル氏(松太郎氏夫人)	同	同	有
12 辻井 繁氏	同	同	有
13 眞野喜三郎氏	同	同	有
14 瀬川 惣吉氏	同	同	有

的指導をして居るのも特記すべきである。飲料水の天水タンクの改良指導から、糞便の處置から、あらゆる公衆衛生に關する注意が拂はれ、マラリア蚊の恐れの小さい水溜りの如きも嚴重に取締まられ、マラリア蚊の子子でも居れば遠慮なく罰金に處すと言ふ態度であるから、ニューギニアの一角に衛生都市が出現した。現在、ラバウル市に關する限り黄熱とかマラリアが殆んどその跡を斷つたと言ふのも羨ましい。南進とか南方資源の開發とか言ふ言葉が使はれるが、それには先づ公衆衛生の正しい指導と言ふことが急務ではないかと痛感される。南洋群島はマラリアの處女地であると言はれてゐるが、近來外南洋との交通が頻繁となり、特に航空路の開發は安眠を食つてゐることを許さなくなるのではないだろうか。外南洋から有用魚類の輸入



第9圖 Keravat 農事試験場



第10圖 白人と土人の混血兒  
(カラバット農事試験場にて撮影)



第11圖 ニューブリテンの土人の家  
ミクロネシア人の家に比して非常に貧弱である、ラバウル市郊外ピラピラ海岸にて撮影。

される場合、マラリア蚊の子子の輸入と云ふことも考慮されねばならぬ。話は太夫横道に外れたが、いゝものを見るとつい自分等のものと比較してみたくなるのが人情だ。  
廿一日。からつと晴れた秋の様な日、朝六時起床。午後二時出航と云ふので大急ぎで買物をすまして、ドイツ人の店で二、三の土俗品を入手した。午後二時、いよ／＼ラバウルともお別れだ。午後の強い太陽を脊に、歸りはプランテエ灣を取り巻く火山群を具さに眺めることが出来た。プランテエ灣を出て、舊火山マザリの後を廻つた所でサラモアからの定期航空機がマザリの頭をかすめる様に過ぎ去つた。  
廿二日午前十時、再びケビアンに入港、上陸に手間どつたが、今度

11 Keravang

氏名	職業	出身縣	ラバウル市民権の有無
15 木村秀一郎氏	ラバウル市を根拠地とし高瀬貝の採集を行ふ		有
16 菊池 一作氏	同		有
17 宮川 清七氏	同		有
18 和泉 孝氏	同	熊本	無
19 野崎常次郎氏	同	同	無
20 勝石 親一氏	同	静岡	無

(昭和十五年三月廿日現在、伊藤ソル氏に依る)



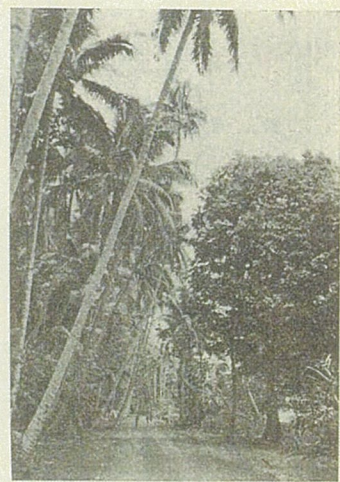
第6圖 プランテーション内のコブラ乾燥場

尙ラバウル市市民権は同市にて生れたもの及獨逸時代より古く居られた人に限られ、市民権を持つた人のみ永住出来るが、新らしく行く日本人は三ヶ年以上の滞在を許さぬとか、旅行者は六ヶ月以上の滞在が許されぬとか、結婚後十年間は妻を呼ぶことが出来ないとか、日本婦人の入國を禁止するとか、種々不合理な事實が多いらしい。とにかく日本人の勢力の増大することを神經過敏な位恐れてゐることは事實だ。當時はまだ獨逸軍が和蘭へ侵入しなかつた前であり、勿論佛蘭西も健在であつた。三國同盟も結んで居ない前であつた。それでも英人、

濠洲人の日本人に對する態度は極めて警戒的であり、一寸した買物も英人の店と獨逸人の店とは非常に對度が違ふやうに思はれた。現在の状態はどの様になつてゐるか想像も出来ない。  
ラバウル市に就てもう一つ附加したいのは衛生都市としてのラバウルである。病院も白人病院と土人病院が、はつきり區別されてゐる。南洋群島の病院の如く島民患者のため、邦人が順序を待つて治療を受けると云ふ現象も起らぬ。病院には臨床醫の他に細菌病理學者が居て、公衆衛生の實際



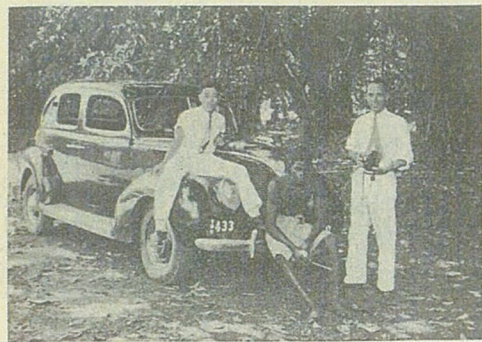
第8圖 Keravat の農事試験場の丘より見たニューブリテンの原始林



第7圖  
ラバウルよりカラバットへ行くよく手入れのされた自動車道路

は上陸出来た。町と云ふより全くの田舎であるが寒村ではない。どこか別荘地へでも行つた感じだ、緑の芝を敷きつめた大ゴルフリンク、清らかな住宅、鬱蒼たる熱帯樹の影、此處を基點とした一五〇哩の坦々たる自動車道路、總てが我が南洋群島とは趣が違つてゐる。埠頭附近には土人病院、支那人街、銀行、バーンズ、フィリッパ百貨店等がある。ケビアンはニューアイルランド中、最良の港で又州政治の中心地であると言はれるが町らしい所はどこにもない。約二時間程で一巡して乗船した。慾を言へば同夜一泊したかつた。

同じコースを歸りはグリーニツチ、ヌコール、ナチツクと一泊づゝし



第12圖 N. B. K. ラバウル支店の荒田邦男氏(右)と田代清氏(左)

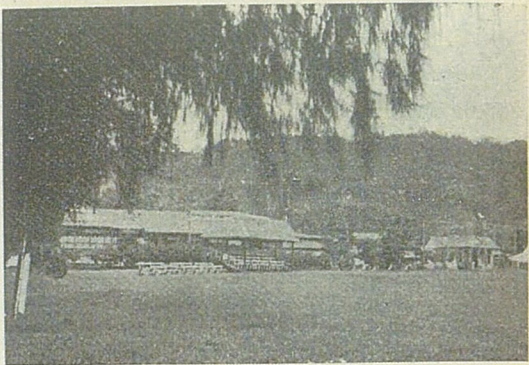


第13圖 ラバウル土人病院の一部



第14圖 Cosmopolitan Hotel

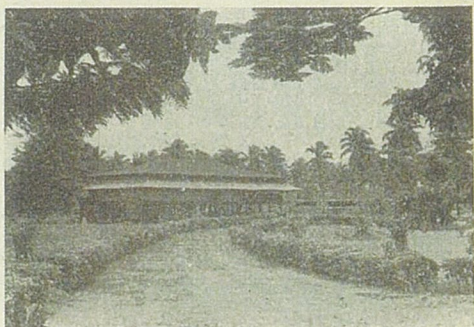
て、バキンに立ち寄りボナベに歸つたのが三月卅日であつた。蛇足の様であるがこれ等ボナベ南方離島に就て附加する。これ等の島はいづれも小環礁で各島いづれも種々な點で多少の相違がある。島の形、島の民の風習、生活様式、家屋の構造、カヌーに至るまで多少の相異が認められるが、ヤツブ離島、トラツク南西離島の如き原始的な所はどこにも見られない。特にナチツクはかつて英國捕鯨船が寄港、島民の男子を全部殺して、現在はその混血の子孫と言はれ、極めて歐化してゐるのが認められる。庭に花を植へ、二階建の家も珍らしくない。グリーニツチ島は南洋群島最南の島で原始的の島を想像させるが、こゝも



第15圖 ラバウル野球場



第16圖 ラバウル新飛行場  
春後の山は活火山 Taurvur (右)と South Daughter (左)



第17圖 ラバウルの白人住宅

著しく歐化してゐる。家は細い木で丁度鳥籠の様に外から内が透いて見へるが、一ス錠をかけてゐる。ヌコールでは英國製のタイプライターのぼつりぼつりと一字々打つてゐる村長が居た。ベッドもタコの葉と椰子ロープで作つた洋式であり、椅子も洋風である。この地方はミクロネシア系と云ふより寧ろポリネシア系と思はれる體軀の大きなが目につく、特に、ヌコール、グリーニツチに於てその感が深い。これ等の島では男子は洋服を着、女子は簡單服様のものを着てゐるがグリーニツチでは時に眞赤な腰巻をまとつた男を見受けた。ドイツ時代にラバウルに政廳を置きボナベに支廳を置き、交通があつたと言ふ

からラバウル土人の風習が傳はつてゐるのも當然なのかもしれない。ボナベからラバウルへの旅行はミクロネシア、ポリネシア、メラネシアの民族の流れと各民族の風習が地理的に入り組んで居るのが見られ非常に興味を惹く。相當年をとつた男は英語、ドイツ語を話す者の多いのも亦注意すべきだ、ドイツ語はボナベのドイツ語學校で習つたと言つてゐるが、とにかく歐洲文化の影響を非常に受けてゐることは確かだ。かつて九大の金平亮三博士がカロリン丸でサラモアへ行かれた

1) 金平亮三 1937. New Guinea 旅行記断片 (1) 及 (2) 植物及動物 第5巻、第11號、p. 113-121. 第12號



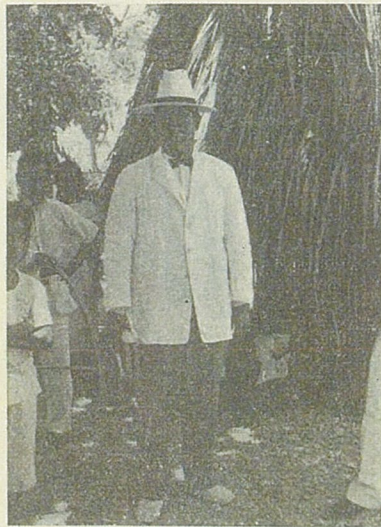
第25圖 グリーニッチ島の島民



第24圖 グリーニッチの島民と家屋

家は細い木で作られて丁度鳥籠の様に外から透して内が見へるが、彼等は鍵を一々かけてゐる。男が真赤な腰巻をしてゐるのが特に目を惹く

文中の地名歐文綴は The New Guinea Handbook. Prime Minister's Department, Canberra, F. C. T. 1937. に依つた。本旅行はパラオ熱帯生物研究所へ派遣された歸途を利用して行つたものである。本旅行の機会と援助を與へられた日本學術振興會及パラオ熱帯生物研究所長畑井新喜司先生、並に南洋廳に對して感謝の意を表する、同時に本旅

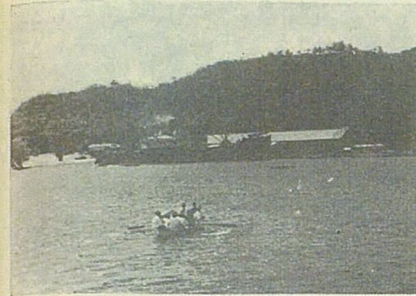


第27圖 ソロールの島民

ソロール、グリーニッチの島民はポリネシア系と言はれ體の大きいのが目につく

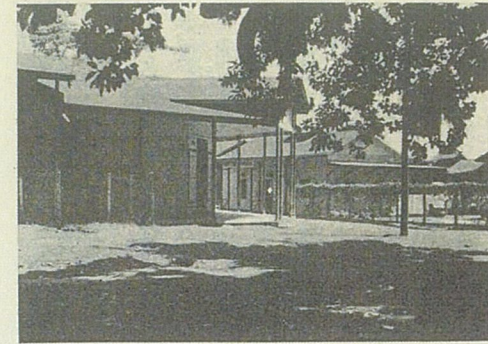


第26圖 グリーニッチ島のポートハウスにて、洋風の椅子に注意

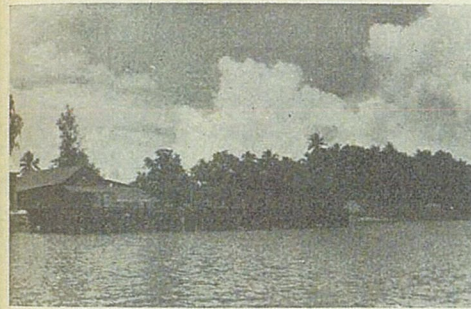


第19圖 高千穂丸を見送る邦人

このポートの人がラバウルの邦人の大半である

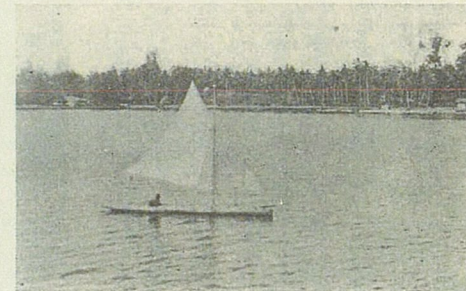


第18圖 N. B. K. ラバウル支店(道の右側)と社宅



第21圖 ケビアンの棧橋

2000噸級の船もつく

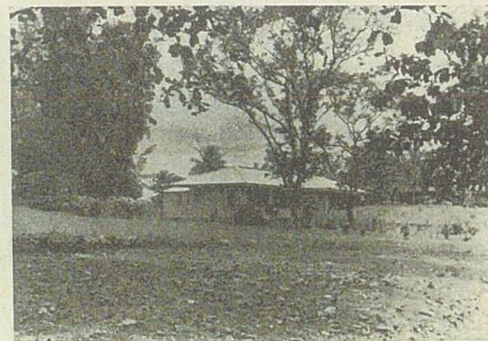


第20圖 ケビアン港の土人カヌー



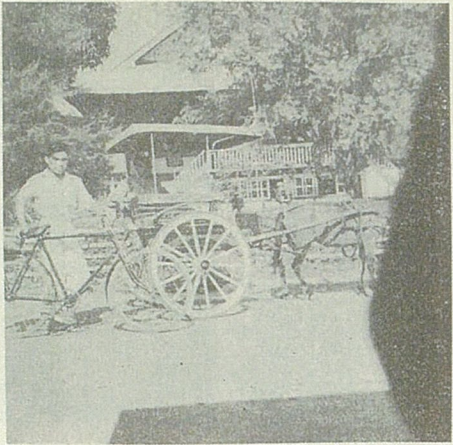
第23圖 ケビアンの娘達

髪は眞白に漂白してゐる



第22圖 ケビアンの白人住宅

感じた。またその道路は曲折と傾斜に富んでゐるが、すべて完全に補装の完成してゐることに一驚した。トングノ湖の眺められる邊り一面は今や水稻の收穫期に近く、椰子の樹を遠景にした黄金の波の動きに私は一寸變な氣分を味つた。椰子を背景にした稻の波。内地の秋と熱帯の景を重複させて焼付けた印畫である。因みに同湖は近く和蘭政府により水上飛行場として活用される由である。



第 7 圖  
メナード名物の乗物ポニー馬車。

それから車を驅つて二〇分、この湖水より導かれたトングノの瀑布を見た。水量豊富にして落下する水の音は相當遠方まで響いてゐた。内地なら、さしづめ發電機が据へられてゐるに違いない。

我々がメナードに還つた時は既に夕闇もせまりつゝあつた。坦々たる道路は、ダバオのそれにも増して美しく、正午から午後四時までに三百軒近くも走破した筈だが疲勞はさ程感じられなかつた。メナード

氣温水温とも二八度、この夜半更に時計を三〇分遅らせた。

この日午後一時三〇分より一時間貴族院議員丸山鶴吉氏の乞により一等遊歩甲板上にて團長前田候以下議員各位並に一等船客等計三十五名の方々に熱帯生物研究所の現況を講述す。

九月十四日、快晴、午前六時バラオ港外に到着、同七時バラオ港に投錨、直ちに税關の檢閲開始、船客特に三等の方々の檢閲に時間多くなかり、上陸許可は午後三時であつた。研究所からはリサーチが來た。

の街には同所獨特の馬車のポニーがどかに駆けてゐた。赤いの、青いの、また黄色いの、色とりどりの熱帯地らしい味を十二分に出してポコポコ走つてゐた。

夕食は前記二葉商會の上園勝二氏の御高志で市内の廣東料理を味つた。食事後しばし休息して、街に出たら、商店街は既に閉店消燈してゐるもの多く暗かつた。七時三〇分山城丸に歸船。同船は八時ダバオ向け出航した。

九月十日、快晴、終日航海、正午位置は北緯四度一八、東經一二五度一四、メナードより一八〇哩、ダバオへ一七四哩、氣壓七五・六・四、氣温水温とも二九度。

九月十一日、快晴、午前六時三〇分再びダバオ港に入る。同八時三〇分上陸、太田興業の小川誠之氏の御案内にて再びタロモの本社を訪ねる。晝食を御馳走になり、農場、發電所等を參觀した。それからダバオの銀座サンベドロ街に到り柏原旅館附近の散策漫歩、夕食は附近の支那料理店です。夜八時一〇分山城丸に歸船、グーラミーは既に積込みも完了してあつた。ブリキ製直徑五〇釐の輸送槽である。同十一時半出港し、一路バラオへの歸途を辿る。

九月十二日、快晴、終日南西の風強く波浪また高し、正午位置は北緯六度一二、東經一二七度三三、ダバオより一四七哩、バラオへ四三八哩、氣壓七五・五・六、氣温水温とも二九度、この夜半二時、時計を三〇分遅らせる。

九月十三日、快晴、愈々明日はバラオへの歸島である。船客一同ために何となく落付きなし。正午位置は北緯六度一一、東經一三二度五四、ダバオより四〇七哩、バラオへ僅か一七八哩、氣壓七五・五・五、備人三名の方々の努力によりダバオよりのグーラミーも無事研究所まで運搬することが出來た。途中換水せず四〇尾のうち二尾の斃死であつた。

以上が今回の外南洋視察概略の日誌抄である。これを以つて出張の機會をお與へ下さつた所長への御報告に代へ、併せて視察中船内及び各地で御厚遇を得た紳士諸賢への御禮の言葉とする。

ラバウル紀行 (一)

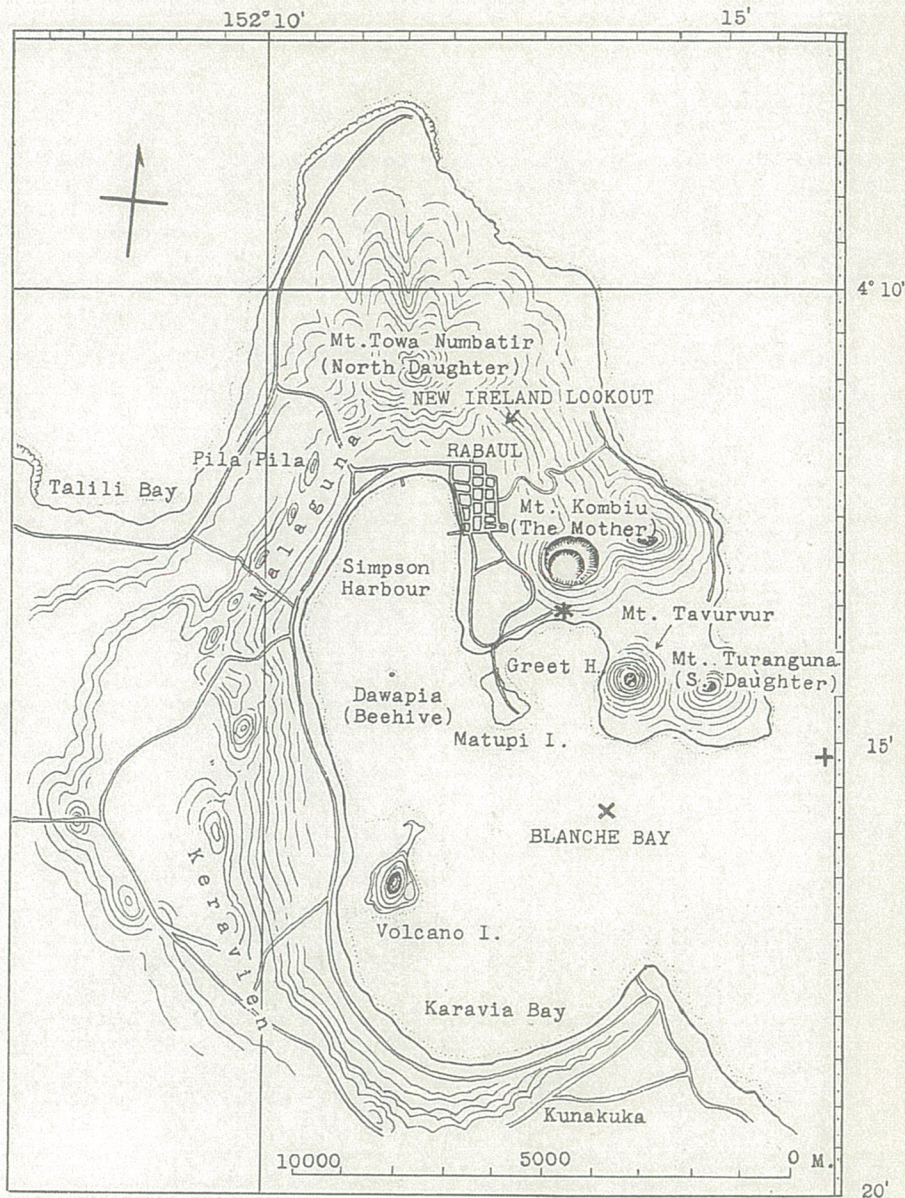


羽根田彌太

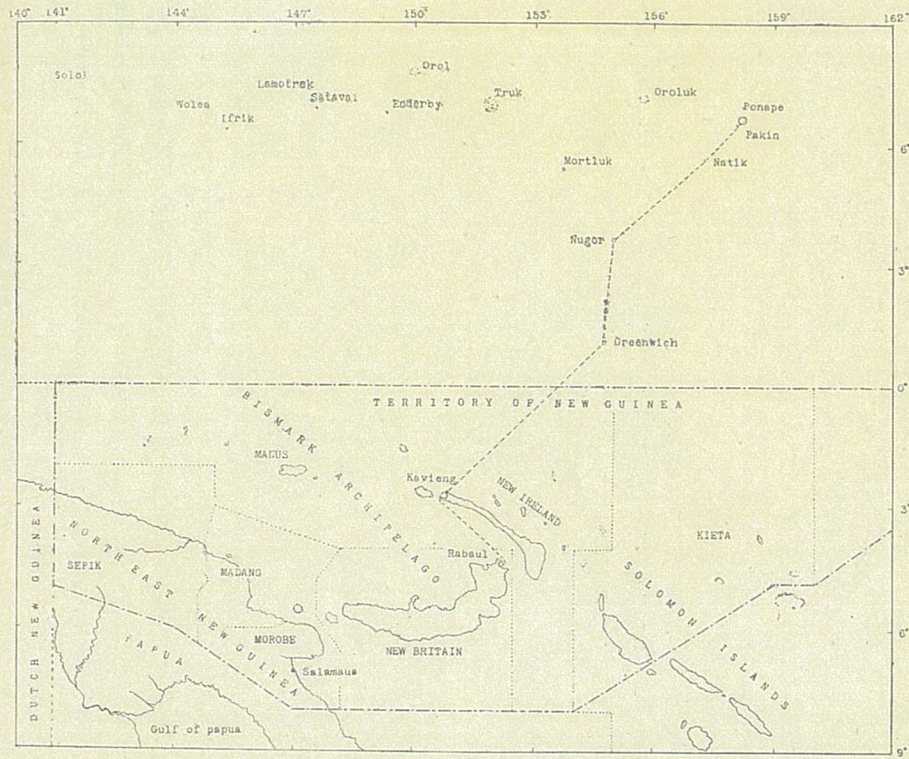
日本内地でニューギニアの話が聞かされても、何となく現實味に乏しく、すぐ行つて見たいと云ふ氣持ちになれない。然し一度我が南洋の島々を訪れるとニューギニアは最早や夢の世界ではなくなる。赤道を跨いで一衣帯水の彼方に暗黒ニューギニアは、はつきりと現實に浮んで來る。私は一種神秘的な響きをさへ持つこのニューギニアと云ふ言葉そのものにも多少魅惑されてゐたかもしれない、兎に角ニューギニアへ行つてみたいと言ふ希望は絶へず懐いて居たが今年三月はからずも、その希望の一部が達せられた。ニューギニアの玄關を一寸覗いてみると云ふ程度に過ぎなかつたが感激は今尙新たなものがある。

三月十一日午後四時南貨の高千穂丸にてポナベ港を出帆、ポナベ南方離島であるパキン、ナチツク、ヌコール、グリーニツツ等の環礁に寄つて十五日には赤道を越へた。濠洲委任統治領ニューギニアの一部であるニューアイルランド島の北端の一部落ケビアンに着いたのが十七日の朝。更に南航、十八日午前十時ニューブリテン島のラバウル市へ上陸した。これが私にとつてニューギニアの地を踏んだ最初である。

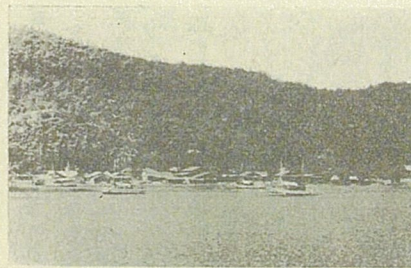
- 1) Pomape 2) Pakin 3) Natik 4) Nugor 5) Greenwich 6) Territory of New Guinea 7) New Ireland 8) Kavieng 9) New Britain 10) Rabaul



第4圖 ラバウル市附近 (海圖より複製)

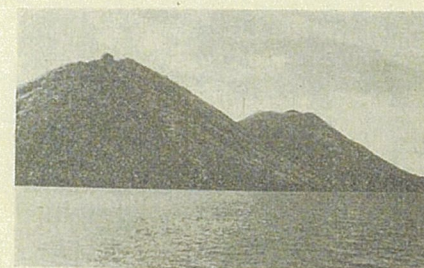


第1圖 濠洲委任統治領ニユーギニア



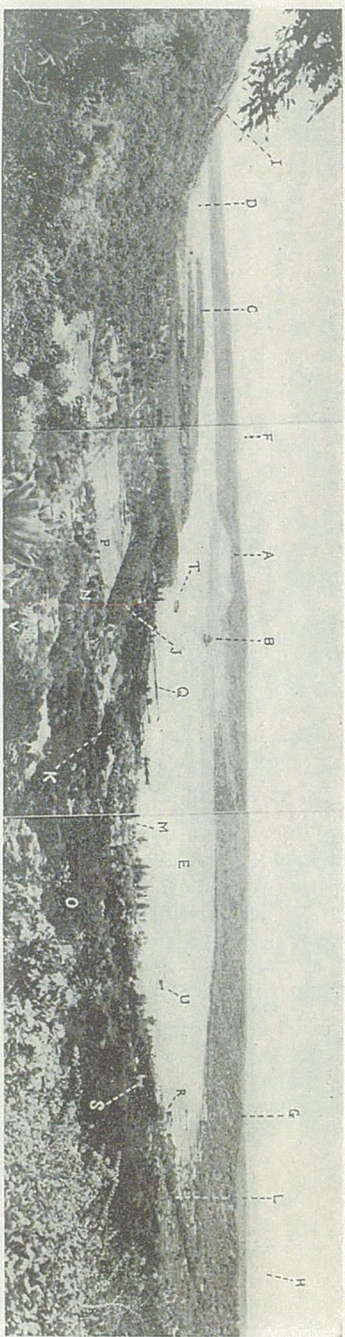
第3圖 ラバウル港

Simpson 灣自體が火口と言はれ水深く天然の良港であるラバウル市をこの寫眞の程度の小高い山が取り巻いてゐる。山の頂上を縫ふやうに小路がつき頂上よりの眺めは絶佳である。第5圖中のUの高千穂丸より撮影。



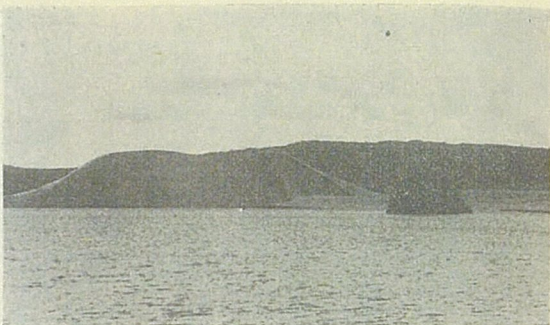
第2圖

South Daughter (前方) 及 Mother (後方)。第4圖+の地點より望む。



第5圖 ラバウル市を環り圍む山の頂上の見晴し景 New Ireland Lookout よりラバウル市ソノン湾、ソノンチエ湾を望む。

- A. Volcano Island (第6圖)
- B. Beehive Rocks (第6圖)
- C. Matupi Island (第26圖)
- D. Greet Harbour と Blanche Bay
- E. Simpson Harbour
- F. Keravien
- G. Malaguna
- H. Gazelle 牛島の山嶽地帯が雲の間にかすかに見える。
- I. この山の頂上にラバウル政廳があり、山の向ふ側に Mother の積塊火口がある。
- J. 亨々たる木麻黄の並木路。(第7圖、第13圖)
- K. マソナーの並木路。ラバウルの中心部で木麻黄の並木路と並行してゐる眞直な通りである。(第17圖)
- L. ネムの木の並木路。海岸線に沿つて長く一直線にチャイナータウンまで續いてゐる。(第12圖)
- M. 住宅街、歐洲人の清雅な住宅が熱帯樹の間に見えぬ。
- N. チャイナータウン。N.B.K. の出張所、鶴島氏の居等がある。(第19圖、第21圖)
- O. 植物園、黒色に見える第一帯が植物園である。
- P. 野球場。
- Q. 政廳大建橋、この附近に税關事務所、無電局がある。
- R. 棧橋、税關、倉庫等あり、高千穂丸はここに着いた。
- S. 教會。
- T. 5000噸級の駁船でバーンズフリックン會社の石炭貯藏所になつてゐる。
- U. 高千穂丸。(第8圖)
- V. 獨逸人その他外人及日本人の墓地、隣には支那人墓地がある。



第6圖 Volcano 島と Beehive Rock (第5圖中の A 及び B 参照)

話を進める前に濠洲委任統治領ニューギニアの概要を述べることにする。

ニューギニアは世界第二の大島と言はれ東經二四一度以西が蘭領ニューギニア<sup>1)</sup>の残りの南半が英領バプア、<sup>2)</sup>残り全部即ち北東部ニューギニアと赤道までの屬島即ちビスマルク群島<sup>4)</sup>及ソロモン群島<sup>5)</sup>の一部を包含した地域が濠洲委任統治領ニューギニアである。ニューギニア本土をセビツク、<sup>6)</sup>マダ

とつては大陸の感がある。島内幾多の火山が噴出、島の中央部に七五四六呎のウラザン(一名フアーザー)はリ克蘭ガ、(一名ノースサン)(三二四八呎)及バームス(一名ソースサン)(七三七六呎)を従へ聳立、その他幾多の火山があるがラバウル市附近にも小火山群が見られる。その北にニューアイルランド島があり、之又、二〇〇哩にも及ぶ細長い島でのやうな貴重な資源が藏されてゐるか今後の探検と開發を待つ島だ。これ等の地域はナウルと共に前ドイツ保護領であつた。ニューアイルランドはノイメツクレンブルグ、<sup>16)</sup>ニューブリテンはノイホーメルン、<sup>17)</sup>北東部ニューギニアはカイザウイールヘルムスランド<sup>18)</sup>

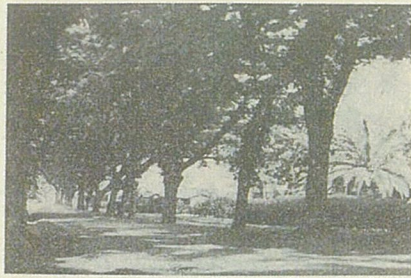


第7圖 チャイナータウンより木麻黄の並木を望む (第5圖中の J 参照)

ン、モロベに、ビスマルク群島をマヌス、<sup>7)</sup>ニューブリテンに、ソロモン群島の一部をキイクと言ふ様に領内は數州に分かれてゐる。ラバウル市は首都であつてニューブリテンの北端にある人口約一萬五千の近代都市である。四年前附近の火山爆發のため今は首府をニューギニア本土のサラモアに遷すことに決定したが、今尙實現に至らず政治、經濟、文化の中心地である。  
ニューブリテンは地圖では見落しうだがニューギニア本土を除いて領内最大の島で又最も重要な位置にあり、幅約五〇哩、長さ三〇〇哩にも及ぶ原始林に蔽はれた島で、我が南洋群島のみを見馴れた者に

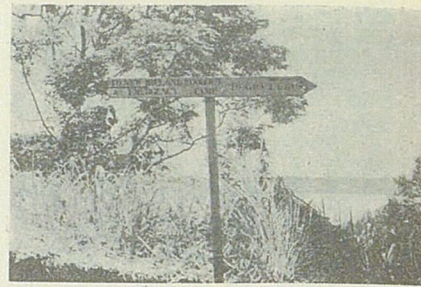
- 1) Dutch New Guinea
- 2) Papua
- 3) North East New Guinea
- 4) Bismark Archipelago
- 5) Solomon Islands
- 6) Sepik
- 7) Madang
- 8) Morobe
- 9) Milne Bay
- 10) Kaituma
- 11) Salamaua
- 12) Uluwatu
- 13) Likiep (North Son)
- 14) Bannu (South Son)
- 15) Nauru
- 16) Neu Mecklenburg
- 17) Neu Pommern
- 18) Kaiser Wilhelms-Land





第 12 圖 ネムの木の並木路

ネムの木が道路の中央に植へてあり、兩側の道路に涼しい熱帯の影を投げてゐる。第5圖 L の如く海岸に沿つて眞直に一本通つて居る。道路に沿つて清楚な住宅が見られる。



第 11 圖 New Ireland Lookout

ラバウル市を取り圍む山の頂上に New Ireland Lookout と云ふ立て札のある眺望絶佳な所がある、静かな海を隔て、New Ireland の山を望み、反対側は Simpson 灣を一望の許にラバウル市を足許に眺められる。第5圖はこの地點から見たのである。

に唯一つの光さへも認めぬいつまでも続く黒い島影を見てゐるとさすがにニューギニアだと、言ひ知れぬ興奮をさへ覚へる、それでも十二時近くに船室へ潜つた。翌十八日午前六時半目を覺した、船は既にニューブリテンの北端プランチエ灣<sup>1)</sup>に入つてゐる。プランチエ灣は馬蹄形の灣で周圍には幾多の圓錐形の火山が見られる。灣口に近く右手にツラングナ<sup>2)</sup>(一名サウスト

ター)(一六二一呎)と活火山タヴル<sup>3)</sup>ル、更に北に中腹に大きな舊噴火口を持つたコンビウ<sup>4)</sup>(一名マザー)(二四七呎)あり、ラバウル市の背後にトワナンバチール<sup>5)</sup>(一名ノースドクター)(一七六八呎)が聳へてゐる。プランチエ灣の奥がシンブソン灣<sup>6)</sup>で一八七二年シンブソンがプランチエ灣を發見した時、この灣に投錨したのでこの名がある。この灣に沿つてラバウル市が發達してゐる。船が灣内に入るにつれて左手に熔岩の流れもくつきりと極めて新しい火山を見た。この山は今から四年前に新しく出来た火山ヴォルカノ島<sup>8)</sup>(一名バ

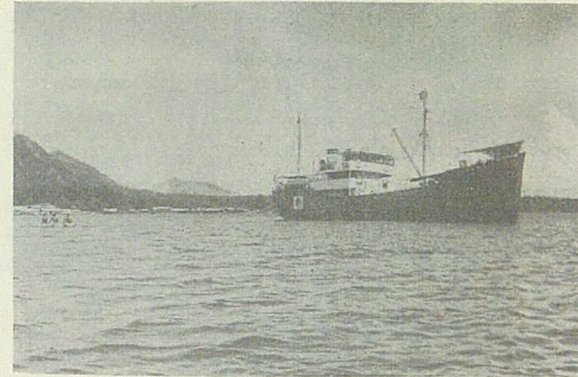


第 14 圖 木麻黄の並木通りより Cosmopolitan Hotel を望む。



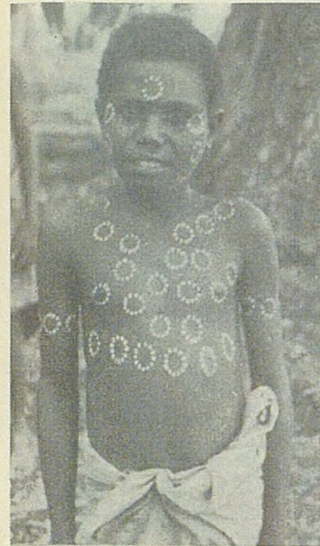
第 13 圖 亭々たる木麻黄の並木通り。

1) Blanche Bay 2) Turanguna (South Daughter) 3) Tavurur 4) Kombin (the Mother) 5) Towa Numbair (North Daughter) 6) Simpson Harbour 7) Captain Simpson, The New Guinea Handbook, p. 5 8) Volcano



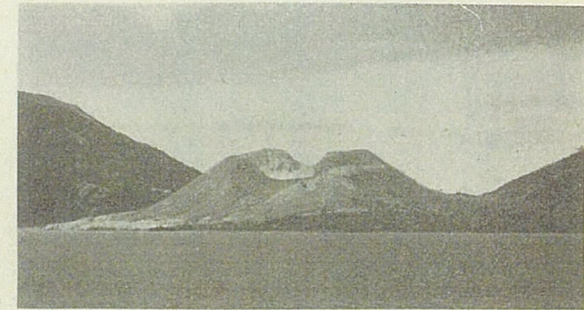
第 8 圖 ラバウル港の高千穂丸

高千穂丸は N. B. K. の 342 噸餘、昭和十二年八月に建造されたカロリン丸の姉妹船である、セミディーゼル機関を持ち南太平洋航路に就航してゐる、客席四つあり。左手の棧橋は政廳の大棧橋で港内水深一萬噸級の船もつけられる。



第 9 圖 體に裝飾したラバウル附近の土人。模様は塗料で書いたものだ、ラバウル市附近ピラピラ海岸にて撮影。

と言ふやうにドイツ名で呼ばれてゐた。世界の狀勢の急激な進展と共に將來、極めて微妙な關係に置かれるであらうことは想像に難くない。三月十七日朝ケビアンに入港、港内で税關吏の來るのを徒に二時間餘も待たされ、みすみす目の前に棧橋を見ながら抜錨を



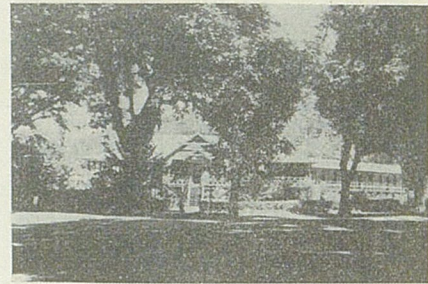
第 10 圖 活火山 Tavurur

大噴火口よりは絶えず水蒸氣を吐き、麓に硫黄の蒸氣が出てゐる、附近の海岸よりは温泉が涌出する。右手の山が South Daughter の麓、左手は Kombiu の舊火口のある山(第4圖 Blanche 灣内×の地點より望む)。

餘義なくされた。それでも棧橋には墨の様に眞黒な土人が赤い腰巻を纏ひ悠々と釣糸を垂れてゐる様、對岸のヌサリツク島<sup>1)</sup>から土人特有の片影が窺はれる。珊瑚の水道を船は右往左往して遂にニューギニアランドの北端を廻りガゼル<sup>2)</sup>海峡に出て終日低平なニューギニアランド北部の陸地を見ながら航海を続ける。その夜はデッキに出て、初めて見るニューギニアの屬島を淡い月光を通して飽かず眺めてゐた。海岸

1) Numbait 2) Gazelle

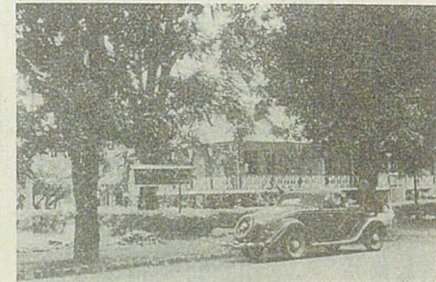
ルアン島<sup>1)</sup>であつた。即ち一九三七年五月廿九日午後四時、突如低平なゾオルカノ島の一角から爆發、噴煙は天に沖し翌日對岸の活火山タヴルヅルも相應呼して爆發、火山灰はラバウル市



第15圖 土俗博物館  
植物園の一角にある。第5圖Kのマンゴアの並木と同Lのネムの木の並木の交はる所にある。農務局の附屬で Museum の看板がかゝつて居るが、主にニューギニアの土俗品が集めてある。右手の低い建物は農務局の一部である。

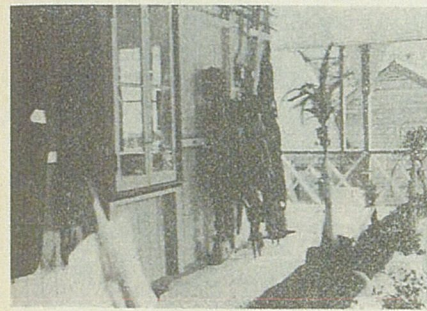
を廻つてゐた。

ラバウルに第一歩を踏み感じたことは熱帯の都市として非常によく出来上つてゐる點である。街路樹一本にも一年中続く熱帯の暑熱をどうして防ぐかと言ふ心使ひがある。市街の大半がラバウル植物園で市街そのものが一つの公園の如き感がある。道路の中央に植ゑられた街路樹は兩側の道に大きな傘を擴げ無帽の快適な散歩を楽しむことが出来る。ネムの街路樹、マンゴアの並木、木麻黄の亭亭たる並木道路も素張らしい、植物園も都市計畫もドイツ時代に計畫されたと言はれるが、これをよく育て上げた豪洲人の努力は亦敬服に價す



第17圖 圖書館  
第5圖Kのマンゴアの並木通りにある。この通りはラバウル市の本通りで郵便局、銀行、劇場、百貨店、發電所、製氷所等もある。

を襲ひ爆發は六月三日朝まで續き低平なバルアン島は一週間にして圓錐形の熔岩の山と化したと言ふのである。今では山の頂上が壞れ臺盤状になつてゐるが、それでも當時の物凄かつた様子を語るやうに眠つてゐる。こんなにも新しい火山を間近かに通つてグワビア、一名蜂巢岩(ビーハイヴロック<sup>2)</sup>)を左に見てラバウル棧橋に船をつけたのは十時



第16圖 博物館の内部

る。ボナベ島にも同時代ドイツ人により街路樹が植ゑられ都市計畫もあつたと聞くが、間もなくドイツ人の手を離れ今ではコロニア公學校の近くと支廳の通りにマンゴアの並木が申し譯的に僅に残つて居るに過ぎない。海岸通りには家が狭く建ち並び見るからに暑つさう



第18圖  
マンゴアの並木通りにある電氣會社。

だ。ボナベの様な大きい島にどうしてももう少し大陸的な都市計畫が出来なかつたものであらうか。

ラバウルの人口は一九三七年の調査に依ると約一萬五千乃至二萬、その中歐洲人七百、東洋人二萬、土人八千、その他となつてゐる。歐洲人は英人、豪洲人(ここで言ふ豪洲人とはオーストラリア土人の意味でなく、豪洲に流罪になつた英人の子孫)が大半を占めドイツ人、アメリカ人、オランダ人、その他あらゆる歐洲人が雜居してゐる。東洋人は支那人が大多数を占めて居るのは言ふまでもない。土人は墨下り黒い皮膚を持つたブカ土人、淡褐色のニューブリテンの土人、そこへポリネシア、ミクロネシアまで雜居混血し、正に人種の展覽會場の觀がある。ニューブリテン各地に居る大多數の土人はバブオメラネシア族<sup>1)</sup>と呼ばれる。この名稱はオーストロネシア語を話す移民とバブア語を話す原住民との混血した種族で、ニューブリテンで一般にバブ



第19圖 鶴島氏の店  
チャイナタウンにあり(第5圖N参照) N. B. K. の店と共に邦人のため萬丈の氣を吐いておられる。

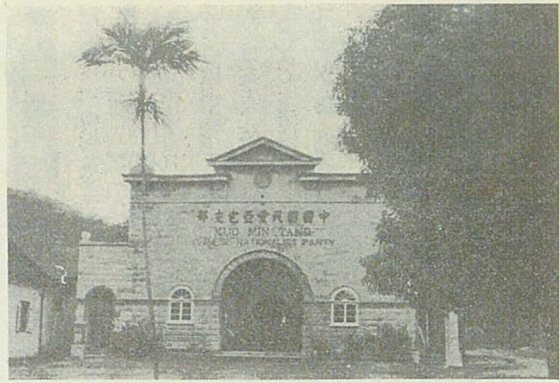
ア族と呼ばれる種族である。ニューブリテンの奥地に蟠居してゐるものは、今尙原始と争鬪の生活を續けてゐると言ふことであるが、ラバウルの土人は奴隸化し従順でピチングリツシ<sup>4)</sup>を話し、文化に浴してゐる。

樹木鬱蒼たる中に清楚な住宅と官衙が点在し、火力發電所と製氷會社、郵便局、銀行、パーンズフイリツプ<sup>5)</sup>及カーペンター<sup>6)</sup>の二大百貨店一週一度開館する映畫館等々が点在する。マンゴアの並木通りが市街の目抜き通りでその北にチャイナタウンが二割を占め南洋貿易の支店、鶴島氏の店、伊藤氏の理髮店などあり。パンフイツク<sup>7)</sup>、コスモポリタン<sup>8)</sup>、ラバウルの三ホテルもある。チャイナタウンもここラバウルでは極めて清潔で支那人町と言ふ感じはどこにも無い。植物園は市街の背後にあり市街と植物園を取り圍んで屏風を立てたやうに山が取り巻いてゐる。上陸早々南貨支店を訪れ田代清氏に案内されて土人の青物市場を見に行つた。ラバウルの



第20圖 Hotel Pacific  
豪洲人の經營でチャイナタウンの一角にある。左手の家の隣がTSURUSHIMA STORE である。

1) Papuo-Melanesians 2) Austronesian 3) Papuans 4) Pigeon English 5) Burns, Philip & Co. Ltd. 6) W. R. Carpenter & Co. Ltd. 7) Hotel Pacific 8) Cosmopolitan Hotel 9) Hotel Rabaul

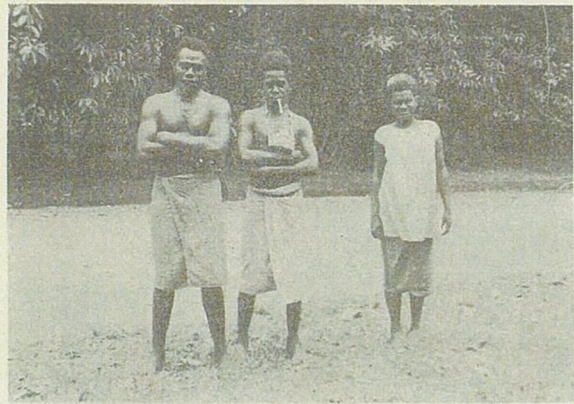


第 21 圖 ラバウル  
チャイナタウンにある中國國民黨支部  
青天白日旗をかかげ華僑の勢力は侮り難い。

土人女は實によく働く。毎朝附近數哩の地から青物果實を頭にかけてバスケットに入れ持つて來るが賣れなければ投賣りもせず又頭にかけて持つて歸るさうだ。この市場での買物はカリフォルニア製のロープ煙草(黒密に漬けた繩狀の嚼煙草で一木六片邦貨三十五錢位に相

當する)が貨幣の代りをする。午後雜貨貿易商として成功して居られる鶴島惣吉氏の運轉によつて土人病院ラバウル飛行場を見に行つた。飛行場はグリーント、灣に面しゴルフリンクの傍にある細長い芝生と言つた感じで、飛行場らしくもないがラバウルと極めて近距離にあり將來性のある新飛行場である。目下カーベントナー會社機ハピランド<sup>2)</sup>十人乗機が毎週一回ニューギニア本土のサラモア、ポートモースビー<sup>1)</sup>を経てシドニー<sup>5)</sup>に到る定期航空路に就航してゐる。

附近一帯の海岸からは熱湯が涌出してゐるが願る者もない。先づ日本人が行けば温泉宿と飲食店、料理屋が建ち並ぶ所だ。

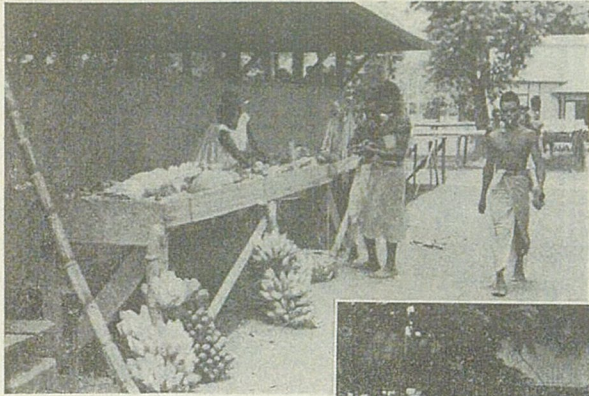


第 22 圖 ラバウルの土人

皮膚は淡褐色から暗褐色で頭髮は元來黒であるがモダンボーイやモダンガールは眞白に漂白してゐる。男は赤い腰巻一つ、女は簡單服用のものをまとつてゐる。

同夜植物園内に足を一步踏み入れて螢の壯觀な發光を見ることが出來た。熱帯地を旅行した人からよく聞くことであるが、螢が一本の木に無數に群り一齊に明滅すると言ふことである。私は一度この壯觀に出會ひたいと願つてゐた。昭和十三年二月タワオへの途中ダバオへ立ち寄つた時、太田興業の方からこの話を聞いたがついに見ることが出來なかつた。タワオ、サンダカンには約二十日餘居て螢を観察した

- 1) Great Harbour
- 2) Haviland
- 3) Salamaua
- 4) Port-Moresby
- 5) Sidney
- 6) Tawau, B. N. Borneo
- 7) Davao, Philippine Is.
- 8) Sandakan, B. N. Borneo



第 23 圖 土人青物市場

毎日午前中に開かれる。蔬菜類バナナ、パイナップル、芋、トマト等が取引される。ラバウル市には魚市場がないので稀にこの市場に魚が出ることもあるが、極めて少なく土人が二、三匹紐に通して持つて來る程度である。



第 24 圖

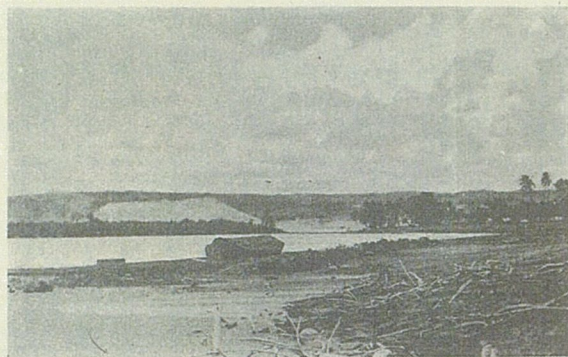
ラバウルの美人連、何れも妙齡の乙女である。



第 25 圖

螢が群るネムの木

が、この様な習性を持った螢は一度も見なかつた、或は熱帯地を旅行した人の誇張した話ではないかと思つてゐたが、今度はからずもこの壯麗な螢を見たので觀察した要點を書き止めておく。この螢は七ミリの程の小さいもので翅は黒色、胸部の背面が赤く日本の姫螢の様で一見して何等特徴がないが、この螢が公園内のネムの木の葉に幾萬、幾百萬



第 26 圖

温泉の涌出する Greet Harbour の海岸より Volcano 島及 Matupi 島を望む。  
左手の椰子の密林が Matupi 島である。ここは Mother の舊噴火口の麓で活火山 Tavurvur の水蒸氣と麓の硫黄の煙が間近かに見へ海岸より熱湯が所々に涌出してゐる。第 4 圖\*の地點より撮影。

と無數に止つてゐて或一定のリズムを持つて明滅してゐる。この光る一塊があちらにも、こちらにもと熱帯の暗黒の中に一齊に一定のリズムを持つて明滅してゐる有様は壯麗と言ふよりは一種神秘的な感じに打たれる。大きな木になると木全體が一齊に明滅するのではなく、木の

上部、中部、下部と云ふやうに二つ、或は三つの群をなして明滅する。明滅する回数は一分間約七十回程で而も光は瞬間的でパツと光つて直ちに消へ、又パツと光るので上の一群が光つて消へると中央の群が光り、次に下部と言ふ様に傳搬するので、丁度稻妻が木の上から下へパツと走る様だ。木の上から下へ、下から上に、斜上から斜下へと休みなく續けてゐる。この壯麗は實際見たものでなければ拙い筆では到底書き現はせぬだらう。強い懐中電燈の光をあてるとこの一定のリズムは亂れ光はまちまちになるが電燈を消すと間もなく又一定のリズムを以つて明滅するやうになる。螢は殆んど飛ばないが飛んで居るものはすい／＼と飛ぶのでなく空中の一定の場所に止つて居る。その有様は空中に浮遊して居ると言つた方がいゝ。この浮遊してゐるものが附近の木の葉に止つてゐるものと、小範圍の群を作りこれ又一定のリズムで同時に明滅する。尙又、この螢は雌雄によつて發光器が異つてゐるのみでなく光の色が違ふ。雌が緑色の光を出すのに反して雄は著しく黄色がかつてゐて、光の色だけで雌雄の區別がはつきりつく。同夜は南支店に厄介になつて約二時間置き位にこの木を見に行つたが遂に朝明るくなるまでこの明滅を續けてゐた。翌日正午この木を見に行つたが螢は烈々たる熱帯の太陽を受けてネムの葉の裏に無數に止つてゐた。十九日夜は高千穂丸船員諸君もこの壯麗な螢を見物に来て、ポナベに螢が居ないので輸入して螢の名所を作ると言つて歸航の時數百も採つて行つたが惜しいかなグリーンニツチ島附近で死んでしまつた。公園内に居た幼蟲を持つて行つたら成功したかもしれないと惜しく思つて居る。この明滅は何か生殖と密接な關係があるやうに思つたので雌と雄とを別々に分けて、その發光の有様を觀察してみた、ウイスキー

の空瓶に二、三十づゝ入れて觀察した處、一定のリズムを以て一齊に明滅するのは雄のみであつて、雌には全くこの性質がなく各々勝手に緩慢な明滅をして居るのを知つた。木の下の芝の上には交尾したのが澤山居るが、交尾中のもは雄の發光は極めて弱く而も殆んど明滅しない、かへつて雌が強く光つてゐるのを見た。尙この螢は晴天の夜も雨の夜も全く同じ様に明滅してゐた。一年中居るらしいがラバウルの人人は別に氣にも止めてゐない。

十九日は市内を見物、圖書館、百貨店を巡つて午後植物園の二隅にある農務局の附屬の土俗博物館を見學した。珍奇なニューギニア全土にわたる土俗品が陳列され、二、三の動物標品が列べてある。それか

ら大急ぎで植物園を取り巻いてゐる山に登る。展望のきく所に New Ireland Lookout の立札と日本風の東屋式の休み場があるニューアイランドが靜かな海に向ふに横はり、シンブソン灣、ラバウル市が一望の中にあり箱庭式の景色で暗黒ニューギニアと云ふ感じは全くない。政廳の發行してゐるニューギニア案内書に the Naples of the South Seas と言つてゐるが、山の上から見た感じは何となく明るい南日本の風景である。(一九四〇、一一、二〇) (以下次號)

\*) The New Guinea Handbook, p. 103.

### 抄 録

#### バラオ港外珊瑚礁沖に於けるマクロプランクトンの定量的研究

Moroda, S., 1938. Quantitative Studies on the Macropkankton off Coral Reef of Palao Port. Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 15, 4, 242-246.

南洋廳水産試験場の委託によりバラオ港外珊瑚礁沖に於て昭和十一年十月より同十二月に至る期間に行ひたるマクロプランクトンの定量的研究の結果を報告す。採集は十日毎に行ひ、水深三〇〇、一五〇、

五〇米各層よりの垂直採集をなす。採集網は最初ミューラーガーゼ三番製、口面積二六六平方寸、布面積二三八〇平方寸のものを使用せしが中途破損せる爲後半は晒木綿製、口面積同前、布面積五二七八平方寸の網を用ひたり。全期間に於ける結果は次の如く、バラオ沖のマクロプランクトンは極めて少量なる事を認めたり。

水	深	100—150米	150—200米	200—300米
全 個 體 數		13,350—1,600	5,700—1,100	1,300—1,600
海水一〇立につき		*1.3—0.1	0.2—0.05	*0.1—0.03

(\* 原著中の數字は計算の誤)

(元 田 茂)